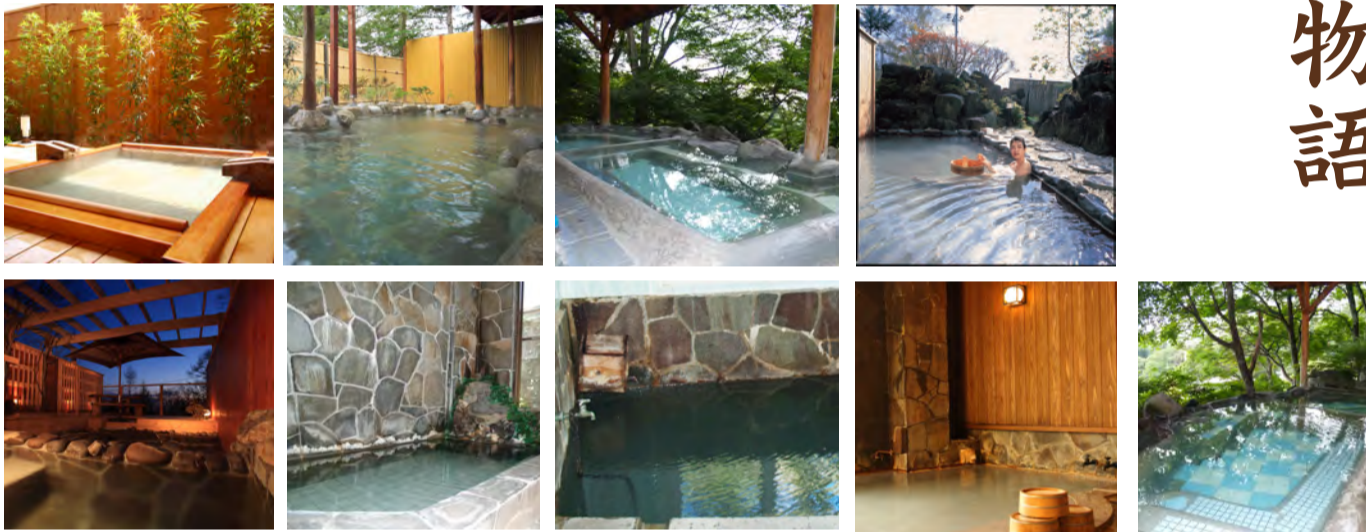




蓼科三室源泉開発物語



蛇口から出る際には
47℃くらいの弱酸性泉に。



1958年(昭和33年)、時代は高度経済成長期の真ただ中。

東京タワーが完成し、海岸沿いには石油コンビナートが建ち並んだ。この年、トヨタ自動車販売の社長を務めていた神谷正太郎氏が「八ヶ岳中信高原国定公園」の総合開発のため、蓼科に東洋観光事業株式会社を創立しました。

蓼科温泉郷が武田信玄の隠し湯として開かれたと言われている様に、蓼科は古くから温泉が湧き出る地域です。東洋観光としても蓼科の別荘地を開発していく中で温泉は大変魅力的なものでした。

1961年(昭和36年)、蓼科高原別荘地の三室平に源泉があるということがわかり、温泉掘削を開始しました。

諏訪大社の神、建御名方命らが3匹の蛇に姿を変え、かくまわれた暖かい3つの穴=三室の伝説にある様に、三室平は昔から温泉があるのかも噂されていました。

井戸や温泉の源泉を掘り当てる技術は現代ではかなり進歩してはいるものの1960年代初頭では、まだまだ勘頼りの部分があり、掘り当てるのは一種、賭けのようなものでした。やはり、三室源泉も例外ではなく掘削開始から約5年の歳月を経て1966年(昭和41年)、ようやく温泉給湯を開始することができました。

三室源泉は地下72mの比較的浅い所から毎分2,200ℓ、80~83℃という高温の温泉を湧出しています。高温であるため加熱の必要が無い源泉掛け流しであり、蓼科の他の温泉と比べてもかなりの高温です。泉質としては群馬県の草津温泉に近いと言われています。もちろん、80℃以上の源泉をそのまま給湯する訳にはいかないの、加水して56~61℃にまで温度を下げられます。ここまで温度を下げると配管を通る間にさらに温度が下がり、蛇口から出る際には47℃。湯舟にためるとちょうど良い43℃くらいになるのです。

1966年(昭和41年)に給湯が開始された三室源泉は50年の年月を経て、総配管距離55kmとなり、源泉周辺のホテルや旅館、共同浴場など10施設の他、個人の別荘や企業の保養所など約350軒(約800口)に配湯するまでになりました。

三室源泉は殺菌力の強い成分を持つ、高温の弱酸性泉で、効能は神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩、慢性消化器病、痔疾、慢性皮膚病、慢性婦人病、動脈硬化症など。

また、湯冷めしにくく、よく温まるので、疲労回復にもおすすめです。

蓼科にお越しの際は是非、お試しあれ。